

評価項目	重点目標	取組の内容		中間評価		◎学校関係者評価	評価	期末評価	
		・具体的な方策（取組）	★評価の観点（指標等）	○ 成果と▽ 課題	● ▼ 期末への方策等			○ 成果と▽ 課題	● ▼ 次年度への方策等
確かな学力の向上	◇生徒が主体的に考える授業を構築する。	○生徒の問いを重視し、試行→考察→共有→改善の流れになるよう、授業改善を行う。 ○協働的な学びと個別最適な学びができるよう、授業改善を行う。	★生徒の意識調査において、「自分から主体的に学ぼうとしている」という項目の、肯定的割合を90%にする。（昨年度 87.8%）	○肯定的割合は、83.7%であった。 ▽落ち着いた授業を受けるということではできているが、生徒の主体性を引き出すことが課題である。	●授業のゴールをはっきりさせ、何を身に付けるべきかを授業で提示する。 ▼主体的に考えたり、協働的に探究したりする時間をつくれるよう授業改善を進める。	◎主体的に学ぶことを肯定する割合が83.7%であることは素晴らしい。（大木）	B	○「あてはまる」項目は41.6%と大幅に向上させることができた。 ▽肯定的な割合としては82.5%で目標を下回った。	●月1回の校内研修をもち、生徒の主体的な学習をテーマとして、授業改善を進める。 ▼授業ごとに主体的に取り組める活動を必ず入れ、生徒にも意識させる。
豊かな心の育成	◇「リスペクト」の視点に立ち、人と接することのできる生徒を育成する。	○「考え、議論する道徳」授業を行い、さまざまな課題を話し合ったり、考えたりしながら解決を目指す生徒を育成する。 ○生徒には敬称をつけて呼ぶよう徹底する。	★生徒の意識調査において、「相手の人格を大切にし、互いを認め、尊重して行動できる」という項目の「あてはまる」という回答の割合を向上させる。（昨年度 58.3%）	○「あてはまる」は49.6%であった。肯定的割合は90.7%で、浸透はしている。 ▽相手を尊重しないとトラブルがまだ起こっている。	●すべての教育活動において「リスペクト」の精神を徹底するよう、学校全体で意識をもつ。 ▼道徳の授業を着実にを行い、「リスペクト」の精神を高める。	◎すべての生徒にリスペクトの精神が浸透している。（PTA） ◎相手を尊重しトラブルを起こさない取組み。（大木） ◎来校時の生徒の挨拶が増えた。（齊藤） ◎リスペクトの言葉は、学校に落ち着きをもたらす。（柳井）	A	○構成的グループエンカウンターを取り入れて、安心できる学級づくりを推進できた。 ▽「あてはまる」は49.6%のみであり、向上させられなかった。	●学級活動・道徳においてグループエンカウンターを取組を進めていく。 ▼校長講話や生活指導などでリスペクトを基準とした講話や指導を推進していく。
体力の向上	◇体力向上への課題を意識し、その解決のために取り組もうとする姿勢を育成する。	○男女共修の取り組みを通して、生涯にわたってスポーツを楽しむことのできる姿勢を育む。 ○生徒主体でスポーツを楽しむ機会を創設する。	★生徒の意識調査において、「体力向上のために何か取り組んでいる」という項目で、肯定的回答の割合を向上させる。（昨年度 67.6%）	○肯定的割合は 77.5%と向上している。生徒会主催のドッジボール大会を行うことができた。 ▽コロナ禍による体力低下が問題である。	●生徒が主体的に楽しんで運営する運動会を実施することができた。 ▼秋にも生徒会主催による体力向上の取組を行う。	◎生徒会主催で全校生徒が体力向上を目指す取組ができています。（PTA） ◎スポーツ大会等を開催（大木） ◎運動会は全生徒が楽しんでいた。	A	○生徒主体の運動会やダブルダッチなどの活動を行うことができた。 ▽肯定的割合は66.4%とだいぶ下がってしまった。	●生徒会を中心とした取組を継続する。 ▼学校の重点目標として体力向上を位置づけ、生徒主体の体育的行事を提案する。
創意工夫ある教育	◇生徒主体の学校行事を行い、「やりとげ」生徒を育成する。	○「主体的に楽しむ生徒の姿」を理想像とし、主体性に基づく楽しさを味わわせるよう計画する。 ○生徒が主体的に関わるよう、生徒の意見を取り入れることを優先する。	★生徒の意識調査において、「学校行事に主体的に参加し、協力して活動できた。」という項目で、肯定的回答の割合を維持する。（昨年度 95%）	○肯定的割合は 90.7%であった。運動会をはじめとし、生徒が主体的に楽しんで運営することができた。 ▽2 学期の行事でも生徒の主体性を活かすことが大切である。	●学芸発表会において、生徒が主体的に楽しめるような運営を行う。 ▼学年行事においても、生徒の意見を取り入れることができるようにする。	行事において生徒の主体的運営がよい。（大木） ◎地域清掃へ参加。目的意識を持って取り組む生徒の姿があった。（齊藤） ◎行事では、達成感や成就感が感じられた。（宇野） ◎自己表現の発表の場面の工夫があった。	B	○学芸発表会においても、生徒が企画して、自分たちで取り組む活動にすることができた。 ▽肯定的割合は 86.2%に下がってしまった。	●運動会・学芸発表会・校内展示会の企画を生徒に考えさせ、生徒自身の発表の場とする。 ▼学年行事においても同様の取組を行い、主体的に楽しむ生徒を一人でも増やしていく。
地域連携	◇地域協働学校として、地域と連携した教育活動を充実させる。	○生徒が主体的に地域と関わる行事を創設する。 ○学校だよりを毎月発行する。生徒の活動などを報告するブログは、平日毎日更新する。	★地域協働学校運営協議会をアンケートや紙面なども含めて8回以上実施し、地域の方の意見を聴く機会を設定する。	○「地域の方と一緒に活動してみたい」という項目では、69.0%の肯定的回答があった。 ▽地域との連携が大きな課題である。	●避難所運営訓練等で生徒の参加を呼び掛ける。 ▼地域のイベントで生徒が参加できるコーナーを用意していただき、地域に参加する楽しさを味わわせる。	◎避難所開設や地域のイベントへの参加等、地域の方々との協働を意識した取組みができています。（PTA） ◎地域と連携してやっていた「緑日」等の復活。（大木） ◎地域センター祭りで吹奏楽が活躍した。（齊藤） ◎地域清掃や落ち葉掃きを生徒と一緒にできた。	B	○避難所運営訓練・地域清掃・地域イベントなどで生徒の参加を促すことができた。 ▽肯定的割合は 67.1%であった。	●避難所運営については1年生の参加を基本とし、そのための学習を積み上げていく。 ▼地域イベント等を積極的に紹介し、地域との関わりを深めていく。
ICTの効果的活用	◇校内における組織的なICTの有効活用を進める。	○多様な教育機会を保障するために、欠席生徒へのリモート授業を随時行う。 ○ドリルパークやオクリンクを活用し、個別最適な学びを推進する。	★生徒の意識調査において、「タブレットを用いて、個人学習をしている。」という項目で、肯定的回答の割合を 90%以上にする。（昨年度 79.9%）	○肯定的回答は 81.4%であった。タブレットでの学習が日常的なものになっている。 ▽タブレットで個別最適学習を推進していくことが課題である。	●タブレットを用いたドリルパークでの学習を推進する。演習や補習などでは、基本的にタブレットを使うようにする。 ▼欠席や、事情があって教室に入れない生徒のリモート授業参加を推進する。	◎タブレットを日常活用して学ぶ姿勢がみられる。（PTA） ◎すべての生徒にタブレットがわたっているのがよい。（大木） ◎学校とつながっているのがよい。（村上） ◎離れていても課題を共有できることがよい。（柳井）	B	○日常的にタブレットを学習に使い、ワープロやプレゼンなどで活用させることができた。 ▽肯定的回答は 81.7%であった。自由に学習に用いる習慣に課題がある。	●これまでの活用に加え、デジタルドリルは全部終わらせることを目標とさせる。 ▼生徒が主体的に学習に取り組む時間に、自由にタブレットを使用して、調べ学習などに用いていいことにする。

様式

いじめ対策	◇いじめ防止に向けて組織として対応する。	○ふれあい月間のアンケートやふれあい面談、Hyper-QUの分析結果、SC アンケートを全教職員で共有し、配慮を要する生徒について理解をもつ。 ○いじめに対して組織として対応する。	★生徒の意識調査において、「先生を信頼し、いじめ等の問題がある時は、すぐに先生に相談している」という項目で、「あてはまる」の割合を向上させる。 (昨年度 58.3%)	○「あてはまる」は 49.6%であった。肯定的回答は 82.9%であった。ふれあい面談や SC アンケートは生徒理解に大変有効であった。 ▽相談する下地は整っているが、さらに信頼感をもたせ、安心感を向上させることが課題である。	●ふれあい面談・SC アンケート活用による教育相談を今後も推進し、生徒が相談しやすい下地をつくっていく。 ▼Hyper-QU の分析を推進し、満足感の高いクラスの取組等を参考にしながら、一人も取り残さない学級運営を目指す。	◎牛二中では、いじめの話を開かない。この調子でいってほしい。(大木) ◎わからない生徒のことを検証し、わかる授業を行ってほしい。(柳井)	A	○ふれあい面談・SC アンケートによる面談を随時行うことができた。 ▽「あてはまる」は 51.1%、肯定的割合は 81.0%であった。学級や学年の安心感を高め、いつでも相談できる環境を整える必要がある。	●ふれあい面談・SC アンケートによる面談に加え、hyper-QUを活用した生徒理解を全校で進めていく。 ▼大人への信頼感をより高めるため、生徒一人一人への声掛けを組織的に取り組んでいく。
評価と改善	◇学校評価、授業評価を活用した改善を推進する。	○学校評価を2回実施し、その結果を検証し授業改善を進める。 ○教員の意識調査アンケートを行い、組織的に学校運営に携わっているか確認する。	★生徒の意識調査において、「先生の授業はわかりやすい」という項目で、「あてはまる」の割合を向上させる。 (昨年度 52.6%)	○「あてはまる」は 47.3%であった。肯定的回答は 88.4%となっている。 ▽よりわかりやすくなるよう、授業改善を進めることが課題である。	●「分かりやすさ」を主眼とした生徒による授業評価を行い、データに基づいた分析・改善を行う。 ▼2 回目の教員の意識調査もを行い、学校経営方針をもとに教育活動を行っているか確認する。	◎生徒が主体的に学習する環境を教員が作っているところがよい。(大木) ◎努力の成果が素晴らしい。(上島)	B	○肯定的割合は 86.9%であり、授業改善は一定の成果を上げている。 ▽	●主体的に学習に取り組む時間を必ず授業に位置付けることを学校の経営方針に位置付ける。 ▼意識調査の結果を校内研修で検討し、経営方針の確認を行う。
特別支援教育の充実	◇特別支援教育への理解を深め、生徒一人一人の発達に寄り添った支援を、組織的に行う。	○特別支援教育委員会による、個別の支援についての検討を充実させる。 ①生徒一人一人に身に付けさせる自立活動と、そのための教育実践を整理し、組織で共有・改善を行う。 ②校内研修会において、特別支援の専門家を招聘し、最新の知見を共有する。	★生徒の意識調査において、「先生の指示や、教室の掲示はわかりやすい」という項目で、肯定的評価を 80%以上にする。	○肯定的評価は 88.4%であった。校内研修会では、構成的グループエンカウンターの特任家を招聘し、自己開示や理想的な学級運営について学んだ。 ▽評価は高いが、特別支援的な視点による組織的な改善が課題である。	●校内委員会においては、一人一人への支援検討を充実させる。学級での支援についてまだ工夫できるところがあるので、委員会で検討する。 ▼校内委員会のレジュメを見直し、生徒一人一人への指導方針が明確になるようにする。	◎一人ひとりの違いを理解し、強みを生かす視点を取入れ運営に生かしている。(PTA) ◎校内のユニバーサルデザインのさらなる活用。(大木) ◎個人の指導、一人ひとりの指導を教員はよくやっている。(宇野)	A	○肯定的評価は 87.6%であった。 ▽校内特別支援委員会において支援検討を行い、学級内での支援に反映させることが課題である。	●特別支援の観点で、校内のユニバーサル化を進める。校内特別支援委員会内に担当部署をつくり、誰にでもわかりやすい指示について校内指針を作らせる。 ▼上記の方策を学級運営に生かせるよう、各学年の特別支援担当に責任をもたせる。
不登校対策の充実	◇組織的に不登校に関わり、一人一人に合わせた指導を通して、生徒と保護者が将来に見通しをもてるように支援する。	○不登校対策委員会において、不登校生徒の情報を集約・整理し、関わり方を検討し、組織的に実施する。 ○不登校支援に関わる研修会の報告を随時行い、最新の知見や実践例を共有する。 ○生徒への関わり方を分析し、随時改善・更新し、組織全体に共有を行って実践する。	★不登校生徒(年間 30 日以上欠席)全員が、何らかの形で学校に関わり、生徒・保護者ともに将来への見通しをもてるようにする。 ★「大人になったら、自分は社会の役に立つ」という項目で「そう思う」と回答する生徒を 35%以上にする。 ★不登校生徒全員が、何らかの学習に関わることができるようになる。	○不登校対策委員会では、一人一人の支援策を検討しながら、様々な研修会の報告を、校内研修の形で実施することができた。 ▽「そう思う」の回答は 17.1%に過ぎず、組織的に自己有用感を育てる取組が必要である。	●学校全体で、生徒にきちんと役割を与えて遂行させ、その過程や結果を丁寧にほめていくことを通して、キャリア教育を実践し、自己有用感を高めていく。 ▼不登校生徒が学習機会をつくれるよう、環境整備と一人一人に合ったやり方の検討を進めていく。	●つくし教室をはじめ様々な選択肢があることを情報共有していくことも大切である。(PTA) ◎不登校は、悪いことではない。しかし、学校は、その不登校生の学習の権利を守ってほしい。(大木) ◎育成会も不登校対策に協力したい。(齊藤) ◎郊外の支援機関との協力。(上島)	A	○不登校生徒全員が学校内外の関係部署とつながるよう、不登校対策委員会で取り組むことができた。 ▽「そう思う」の回答は 16.8%でまだ課題があるが、2 学期以降、様々な場面で生徒に役割を与え、家庭や結果を丁寧にほめていく活動をする事ができた。	●組織的な不登校対策は今後も継続していく。組織の作り方などを新宿区内の学校に周知していく。 ▼不登校生徒が少しでも登校できるよう、あんしんルームの整備を進め、学習機会の確保を行っていく。